
一生一緒に居させてください。

ネッシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一生一緒に居させてください。

【Nコード】

N8390E

【作者名】

ネッシー

【あらすじ】

氷帝のD1の話です。ずっと恋心を抱いていて、親友以上になりたいけど、親友以下には絶対なりたくない、だから告白なんかしない。〜長太郎視点です〜

（前書き）

氷帝のD1の鳳穴二人の話です。BLですが濡れ場は全くありません。

めちやくちや純粹で書いた本人も恥ずかしくなりました（笑）

大切な人なんです。

大切すぎて一緒に居るだけで幸せなんです。

*

俺、鳳長太郎は一個上の先輩に恋をしている。

とっても優しくてカッコ良くて、とっても魅力的な人。穴戸亮さんだ。

中学一年生の時からの片思いだから、もう五年目になる、

俺は今、高校二年生だ。

高校に入ってもまた一緒に穴戸さんとダブルスを組ませてもらっている。

全国で常連という事になっているけど、そんなの関係ない、穴戸さ

んとダブルスが組めるというだけで幸せだ。

今日は名目上はテニスで、俺的にはデートの約束をしている。

もちろん穴戸さんは、そんな事はカケラも思っていないだろう。

今は7時50分、待ち合わせ10分前だ、けど俺は30分前に来たので、もう20分待っている

一緒に居るだけで幸せで、待っている時間がとても有意義になる。

穴戸さんは

「そんなに早く来るな」と言うけれど、楽しみ過ぎて家で待つてなんかいられない。

昨日も今日が楽しみ過ぎて、目が冴えてしまい、あまり眠れなかった。

まるで、遠足前の小学生だ。

でも、やっぱりこんだけ片思いしていると、この先が欲しくなる、この距離じゃ満足出来なくなる。

頭ではダメだと分かっている、でも、時々無防備な背中を見せられたりすると、ギュッと抱きしめたくなる。

でも、そんな事は出来ない…。

今まで五年間ガマンして来たんだ、それが全て無駄になる。

親友のままで居られるんだ、こんなに良いポジションは絶対譲れない。

「好きだ」なんて一生言わない。

女の子には何度か告白された事もあったけど、どうしても穴戸さんの顔が浮かんでしまう。

付き合ったら忘れられるかな？とも思って付き合った事も有るけれど、一週間で、騙して付き合っていることになんかの罪悪感にみまわられ。別れてしまった

その時は

「その気もないのに付き合うなんて言わないで！」と怒られて、それもそうだなと思って、これ以降は全て断っている。

テニスの後はどこに行こうか…、

などと妄想を膨らましていると、声が掛かった

「一人でニヤニヤしてんじゃねえよ！危ない人に見られるぞ！」

「えっ、あ、ハイっ！」いつの間にか穴戸さんが隣に来ていて、ビククリして、あわてて、顔を引き締める。

…が、すぐにだらしく緩んでしまう。普通の高校生が普通に遊びに行くような恰好だと思うのだけど、すごく似合っていてカッコいい。

制服も良いけど私服もカッコいいなあ、なんて思っていると、また声が掛かる

「オイ、ボケツとしてないで行くぞ！今日は一日中打つんだからな！」

「ハ、ハイ！じゃあ行きましょうか。」

声を聞いているだけで嬉しいと思うのだから、相当溺れているのだろう。

穴場であるタダで出来るテニス場に着くと、すぐに着替えて打ち始める。

…といっても夏真っ盛り、少し打っているとすぐに汗だくになる、二時間位打って休憩に入った。

俺が二人分のポカリを買ってきて二人で飲んでいるが、

ゴクッ、ゴクッ

と、宍戸さんが喉を潤す音に、つついそっちに視線がいつてしま
う。

やっぱり好きだなあ、なんて思いながら見ていると、その視線に気付
いたのか、宍戸さんがこちらを向いた。

「お前さあ、なんか俺に言いたいことあんじゃねーの？」

心の中を見透かされたのかと思った…。

「いえ…、何ですか？」

動揺を悟られないように言っ たつもりだが、どうだったかなんて分
からない…。

「いや、やっぱイイ。」

あまり追及されなかったが、不信に思われただろうか？

この後、少し打ってから、昼食を取るためにファーストフード店に入る。

ここでも色んな話をした、俺と穴戸さんの間に会話が途切れる事は無い。

「お前なんで彼女作らねえの？」

「穴戸さんだって作らないじゃ無いですかー、多分同じ理由ですよ！」

これはウソだ、そんな訳が無い、あなたが好きだから、なんて言う訳が無い。

穴戸さんの理由はめんどくさいとかそんな感じだろう。

「ふーん、そっか。」

ちょっと笑ったように見えたのは気のせいだろうか？

この後、公園で昼寝しようぜ、と言う穴戸さんの提案により、木陰で昼寝する事になった。

ちょうど良いベンチがあったので二人で座る。

「膝かせ」

という命令により（俺にとっては嬉しい申し出だが）穴戸さんは俺の膝の上ですやすやと眠っている。

周りには誰も居ない…。

「ハア…、なんで、こんな無防備なんだろう？」

「好きです…。」

中学で切った時から短いままの髪を撫でながら、言わないと決めた言葉を呟いてみる、誰も聞いていないのに恥ずかしくて顔が真っ赤になり、両手で顔を覆う。

言える訳無いよなあ、なんて思いながら、心地よい眠気に誘われて眠ってしまう…。

…

おい、お前オレが好きなんだってな

気持ち悪いな一生俺に近づくなよ

…

「…い、起きろ、寝ぼすけ！おい」

ゴツッ！

頭に痛みを感じて、目を覚ます。穴戸さんがゲンコツを喰らわしたようだ

「い、痛い、ですよー、もうちょっと優しく起こして下さい！」

断片的にしか覚えて無いがスゴく嫌な夢を見ていた気がする。

「俺を放って寝てんのが悪い」と、いつもの自分の理論で言われる。でも、このおかげで、嫌な気分も吹っ飛んでしまう。

「ヨッシャっ！じゃあカラオケでも行くか！」

なんて良いながら、座っている俺の手を引いた。

手が触れただけで俺の心臓ははちきれそうな位にドキドキしている。

その後は、カラオケに行ったけど、緊張しっぱなしだった。

さつき手を繋いだ感触が鮮明に残っていて、ずっとドキドキしてた。

ラブソングなんて歌い始めると、歌詞を自分に当てはめてしまう。

片思いの曲なんて出てくると泣きそうになる。

三時間位歌ってBOXをでた。

もう暗くなってしまった帰り道では、さすがに一日中あそんで疲れたのか、静かに二人で歩いていた、でも、気まずい沈黙では無く心地よかった。

周りには誰も居なくて、とても静かだ。

いきなり、穴戸さんが立ち止まって口を開いた。

「お前さ、俺に言いたいことあるだろ？」

昼間と同じ質問を俺に言ってくる

「お昼のときもその質問しましたよ？」

一瞬ドキッとしたが平静を装い、返す。

「誤魔化すな」

「……」

穴戸さんの目が真剣で、何も言えなくなる。

「お前さ俺がそんなに鈍いと思ってんのかよ？」

そんな事はない、穴戸さんは人の感情に敏感で、言葉は乱暴だけど優しく出来る人だ。

「言ってみれば、もしかしたらって事もあるかもよ?」

「な…んの事、ですか?」

俺の声はだらしく震えている。

「何年間一緒に居ると思ってんだよ。気付かないとでも思ったのか?」

バレていたんだと分かって、俺の目からは涙が溢れている。

「ちゃんと言えよ、聞いててやるから」

「…だつ…て、ず…っと言わないって、決めて…たのに…。」

言葉が途切れ途切れになって、小さい声なのに、周り誰も居ないからハッキリ聞こえてしまう。

「そんな自分で決めたルールなんかもう関係ねえだろ」

「だ、だって…、 いつ…たら、壊…れちゃう」

「アホ、壊れねえよ、壊れねえから言ってみ？」

穴戸さんの言葉一つ一つが爆弾のような破壊力で、俺の心の閉じられているものを壊していく…。

「…お…れ、し…しどさん、…が好き…。」

どうしようも無いくらい好きで、絶対に離れたく無い。

離れる位だったら死ぬ事を選ぶ。

「奇遇だな、俺もだ」

俺の大好きな笑顔で言ってくれる。

俺は加減なんか出来ないで、力いっぱい抱きついた…。

～ e n d ～

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8390e/>

一生一緒に居させてください。

2010年10月14日22時19分発行